Thomas

聖トマス大学通信

vol.101
2009
April

【巻頭メッセージ】
開学から1年 いま「共生」の理念がわたしたちに

【特別ルポ】
「日本グリーフケア研究所」開設

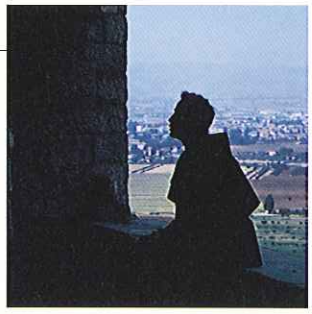
【STUレポート】
第45回聖トマス大学祭「新聖祭」、第41回英南戦、ホームカミングデー

【特別企画】
卒業生からのメッセージ

Thomas
[トマス]
April. 2009 vol.101

言葉の贈り物 ②

「平和の祈り」



アメリカの金融危機に端を発した世界同時不況が現実化し、一方でパレスチナで起こっている悲劇が拡散する危険性も出てきています。社会が乱れ、平和が壊されようとしている今こそ、私たちはアッシジの聖フランシスコによる「平和の祈り」を思い起こす必要があるのではないでしょうか。

神よ　わたしを
　あなたの平和のために用いてください
憎しみあるところに　愛を
　争いのあるところに　和解を

　分裂のあるところに　一致を
　疑いのあるところに　真実を
　絶望のあるところに　希望を
　暗闇のあるところに　光をもたらすことができますように
　　助け導いてください
神よ　わたしに
　慰められることよりも　慰めることを
　理解されることよりも　理解することを
　愛されることよりも　愛することを望ませてください
わたしたちは　与えることによって　与えられ
　すすんでゆるすことによって　ゆるされ
　人のために死ぬことによって　永遠に生きることが
　できるからです

日本カトリック司教協議会訳

CONTENTS

●巻頭メッセージ …… 3
開学から1年
いま「共生」の理念がかたちに
小田武彦（聖トマス大学学長）

●特別ルポ …… 6
「日本グリーフケア研究所」開設

●STUレポート① …… 8
第45回 聖トマス大学祭「新聖祭」

●STUレポート② …… 10
伝統の「英南戦」に挑む

●STUレポート③ …… 11
ホームカミングデー開催（2008年11月3日）

●特別企画 …… 12
卒業生からのメッセージ

●Topics & Information …… 14
キャンパス内配水管改修工事と図書館改修工事が完了
「第23回 園田カーニバル」を開催
ジュニア・サッカー大会「聖トマス大学杯」開催
聖トマス大学梅田キャンパス（仮称）について

（付録）
法人会計決算の概要（平成19年度）
貸借対照表
法人理事長ならびに評議員の交代のお知らせ

企　画：聖トマス大学入試広報課
編　集：株式会社 教材研究所
デザイン：堀内デザインオフィス
撮　影：聖トマス大学入試広報課
　　西村浩一・平垣内悠人・桂　秀也
印刷製本：株式会社 スイッチ．ティフ

開学から1年 いま「共生」の理念がかたちに

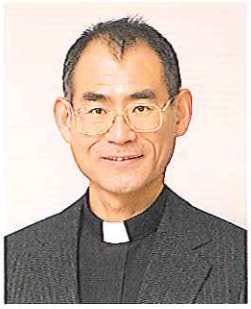
小田武彦（聖トマス大学学長）

本学が「聖トマス大学」として新たな歩みを始めて1年。学生、留学生、教職員、そして地域の方々との結びつきのなかから私たちがめざす「共生」の、具体的なかたちが見え始めてきました。

大学祭、地元イベントでの交流 教育・研究で「共生」がかたちに

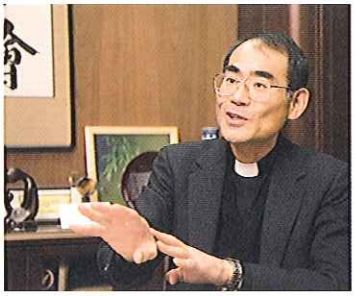
聖トマス大学の開学とともに、人間文化共生学部という新しい学部が立ち上がりました。人間・文化を深く学ぶことで他者を理解し、共に生きる道を探るという「共生」。構想段階ではまさに理念の世界にあった「共生」が、学生・教職員・地域の方々、関係各位の皆様方のさまざまな活動や交流を通じて、具体的なかたちとなって現れてきています。「共生」とはこういうことだったのかと、私たち自身も改めて目を開かされる1年だったといえます。

たとえば学生の社会性を養う「STUアワー」というプログラムでは、労働組合の幹部



小田武彦（おだたけひこ）

1953年、奈良県生まれ。1981年、上智大学大学院神学研究科博士前期課程修了。1988年、教皇庁立グレゴリアン大学宣教学部博士課程修了（宣教学博士）。1990年、日本カトリック宣教研究所研究員、1995年から同研究所所長。2000年4月、英知大学に着任。2005年より同大学長。2007年5月、名称変更により聖トマス大学学長に就任。



や障害者の方を講師に招き、不況のなかで続く解雇の問題や少数者への権利の保障などについて話していただきました。以前の本学では考えられない企画です。人間文化共生学部が昨年4月に始まってから、これまでにない新しいうねりが起こっていると感じています。

最も大きな変化は地域とのつながりが密接になったことです。昨年は地域の方々からの要望があり、学生たちの「新聖祭」と地域の方々の「平和祭」を共催するかたちでの大学祭が実現しました。おかげでこれまででは考えられないようなゲストがたくさん来学されました。朗読劇をしてくださった中国残留孤児の方もそうですね。地元の町内会の皆さんや障害者施設の方々などもお集まりいただき、従来とは比べ物にならない参加人数になったと思います。

園田界隈の公立の小・中・高校生の発表会を中心に、近隣のいろんな施設、自治会が参加する園田カーニバルを本学で開催できたことも大きな出来事でした。毎年、園田競馬場が会場になっていたのですが、都合で使えないということで依頼があり、本学を会場として提供しました。当日は7000人もの人で賑わいました。

また、市民・企業・学校・行政などのまちづくりの主体が協働した「市民まちづくり交流大会」も本学で実施されました。こうした地元とのふれあいがきっかけとなって、商店街の方から授業に役立つ資料をファックスで送っていただいたり、私自身も尼崎市の商工会議所の記念講演に迎えられたりと、地域連携の輪がどんどん広がり始めています。

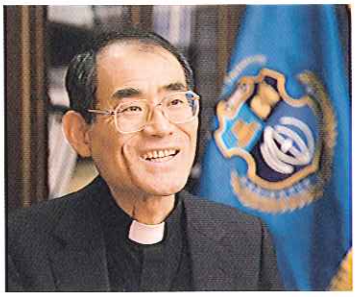
教育・研究の分野でも地域との結びつきから素晴らしい成果が生まれています。本学では「尼崎学」という授業を設けていますが、2名の担当教員が尼崎について研究すると同時に、地域のさまざまな活動をされている方々に授業にお越しいただき、インタビュー形式で貴重な体験談をうかがったり、質疑応答などしながら学んでいます。

もうひとつ「図書館フォーラム」という公開講座では、地元のさまざまな職種の方、貴重な体験をされた方などに講師になっていただき、お話をうかがうと同時に、その講演記録をビデオで保存する活動を続けています。これはどこにもない、まさに本学にしかない資料であり、今後の地元研究に欠かせない貴重な財産になってくると思います。

「共生」を実践する大学として「悲嘆」を学ぶ日本初の研究所を設立

留学生との「共生」も忘れてはなりません。本学の姉妹校、フィリピンのアクィナス大

昨年11月に行われた第45回　聖トマス大学学園祭「新聖祭」は、地域住民が進めてきた「平和祭」との共同開催という画期的な形となった。恒例の学内展示や模擬店、イベントに加え、地元のNPOや市民グループの展示、朗読劇なども行われ、市民と大学が一体となって交流を深めた。
（詳細は8ページ参照）



学の学生たちが短期文化研修のため本学を定期的に訪問するようになりました。彼らを本学の学生が迎えて、京都・奈良を案内したり、日本語の勉強のお手伝いをしたりして、双方の学生にとって有意義な交流が行われています。その逆に本学の学生もフィリピンやアメリカの姉妹校で学び、多くの刺激を受けて帰国しています。全世界に広がるＩＣ－ＵＳＴＡに加盟した成果が早くも現れてきたと感じています。

本学には現在２００名もの留学生が在籍していますが、彼らは彼らで尼崎市の国際交流協会の弁論大会に出たり、地元のお祭りに参加して故郷の料理を振る舞ったりして、しっかり地域に溶け込んだ交流をしています。あるいは在留外国人の子女に日本語を教える、留学生によるボランティアサークルもあります。さまざまな国のさまざまな歴史や文化を背負った人間が、体験を共にすることで「共生」を学んでいく。そんな学びが、本学を中心に至るところで繰り広げられていることを誇りに思っています。

最後にご紹介したいのが、昨年の11月21日に開所記念式典を行った日本グリーフケア研究所です。愛する家族、親しい人を亡くした人たちの悲嘆やそのケアについて研究するとともに、悲嘆する人々のケア、すなわちグリーフケアを実践する専門職を養成する日本初の研究所です。地域社会の人間関係がますます希薄になりつつある現代にこそ重要な役割を果たすものと考えています。

研究所設立のきっかけとなったのは、２００５年４月15日のＪＲ福知山線脱線事故を機に始まった「悲嘆について学ぶ」公開講座です。定員３００名に対して、その数倍もの参加希望者があることからも社会の関心の大きさがわかりました。私たちとしても大きな社会貢献になるものと考えています。

日本グリーフケア研究所は２００９年４月に本格的に活動を開始します。名誉所長を引き受けてくださった聖路加国際病院理事長の日野原重明先生のもと、この分野のトップクラスの先生方が結集し、悲嘆についての研究・教育を展開していきます。

＊

「共生」を理念に開学して1年。聖トマス大学では、私たちの想像を超えるさまざまな成果が現れてきました。私たちは「共生」という理念を具体的に実践していくための拠点として、次年度も着実な歩みを積み重ねていきたいと考えています。

JR福知山線脱線事故の遺族の方々のグリーフケアを目的に平成19年秋から本学で連続公開講座が開かれ、これが契機となり昨年11月に日本で初めてのグリーフケア研究所が本学に誕生した。名誉所長の日野原重明氏が講師を務めた記念講演には約800名もの市民が本学の体育館を埋めた。
（詳細は6ページ参照）

「日本グリーフケア研究所」開設

記念講演に先立ち、日本グリーフケア研究所開所式が行われた。池永理事長より名誉所長の任命書交付を受ける日野原重明氏。

聖トマス大学の新しい研究施設「日本グリーフケア研究所」が2009年4月1日に開設されることになり、昨年11月21日に研究所祝福式および開所記念講演会が行われました。「グリーフ（悲嘆）」とは、家族や親しい人を亡くした後に陥る複雑な心理状態のことですが、当研究所はこうした悲嘆者の心を癒す「グリーフケア」を専門的に研究するとともに、社会で実際にケアに当たる専門職（グリーフケア・ワーカー）養成をめざす、我が国初の研究機関です。

平成17年4月、本学キャンパスからわずか1キロほどの地点でJR福知山線脱線事故が発生し、平成19年10月から、本学では遺族のグリーフケアを目的とした公開講座「『悲嘆』について学ぶ」が、JR西日本の寄付協力により開催されてきました。この公開講座には、毎回定員の2倍～3倍もの受講希望があり、グリーフケアについて、遺族をはじめ一般市民の関心が非常に高いことが示されました。またこの講座を進めていくなかで、受講者から「グリーフケアをもっと専門的・実践的に学びたい」との声も聞かれるようになり、今回の研究所開設へとつながっていきました。

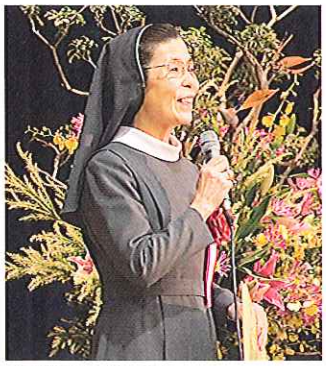
研究所所長には、公開講座のコーディネーターであり、長年にわたりグリーフケアやターミナルケアに携わってこられた本学客員教授の高木慶子氏が、名誉所長には聖路加国際病院理事長の日野原重明氏が、各々就任されました。

「かつて日本社会は大家族で生活が営まれ、地域社会でも濃厚な人間関係があったので、そのなかで悲嘆は癒されていました。しかし核家族となり地域の人間関係も希薄になった現代社会では、第三者から意識的にケアを受ける必要が生じてきました」と高木所長は研究所開設の背景事情や必要性を説き続けてきました。

高木所長（左）と日野原名誉所長（右）

また高木所長は「悲しみや苦しみの中にいる人に共感し、共に歩める温かい社会を築きたい。言葉だけでなく心で寄り添える人材を育てたい」と抱負を述べるとともに、「我が国でも屈指の研究者やスタッフが集まり、またJR西日本のご支援により日本で初めてグリーフケア研究所を開所できることに大きな喜びを感じています」と感謝の意を表しました。

4月より始まるグリーフケア・ワーカー養成講座は、定員40名で、主に社会人や医療関係者を対象として開講されます。聖トマス大学の教育理念である「共生」への取り組みのひとつとして、人々の心のケアに携わる有為の人材の育成が期待されています。



高木慶子(たかきよしこ)
熊本県生まれ。聖心女子大学文学部心理学科卒業。上智大学神学部博士前期修了。博士（宗教文化）。2007年より聖トマス大学客員教授。長年にわたり、終末期の患者のターミナルケアや、病気や事故などで家族を亡くした人々のグリーフケアに携わり、現在、日本ではその第一人者として心のケアを実践している。

日野原名誉所長の記念講演。約800名の聴衆が本学体育館を埋めた。

日野原重明(ひのはらしげあき)
1911年、山口県生まれ。京都帝国大学医学部卒業後、聖路加国際病院内科医となり、同院長を経て、現在理事長・名誉院長。1999年文化功労者。2005年に文化勲章受賞。終末医療の普及や医学・看護教育に尽力。現在も医師として診療を続けながら、講演や著述活動にも精力的に取り組んでいる。

日本グリーフケア研究所開所記念講演

「愛する者を喪った悲しみにどう耐えるか」

講師●日本グリーフケア研究所名誉所長　日野原重明氏

日本グリーフケア研究所祝福式に引き続いて、午後6時より日野原重明名誉所長による記念講演会が聖トマス大学体育館で開催されました。この講演は公開講座「『悲嘆』について学ぶ」の第3期講座も兼ねており、JR福知山線脱線事故の遺族や学校関係者など約800名が聴講しました。

今年で98歳を迎えられる日野原先生ですが、約1時間の講演中は終始立ったまま、壇上で身振り手振りを交えながら心のケアへの思いを聴衆に熱く語りかけました。医療技術や薬では治せない人の心にどう触れ、癒していくか…、日野原先生は、古今東西の先人の言葉に自らの体験談を重ね合わせながら、患者や悲嘆者の心に愛情をもって寄り添っていくことの大切さや難しさを示しました。

「私は常日頃から医者として、サイエンスとしての医学を極めるだけでなく、人を愛する心を持ち続けることの重要性を痛感してきました。ガン末期患者の痛みはモルヒネで緩和できますが、心の痛みはその人に寄り添おうとする愛情がなければ癒せません。患者の余命の告知についても、科学的な見地からの宣告はなるべくしないようにしてきました。自分の愛する家族だったら一体どうするだろうと考え、とにかく一緒に頑張りましょうとだけ伝えるようにしてきました。

私は、〝テンダー・ラビング・ケア〟という言葉が大好きです。優しく愛をもってケアすること。患者の心に寄り添い、時間の許す限りそばにいて、体を優しく撫でてあげるような診療。これは、ホスピスの患者や死期の迫った患者に接する際、いつも心がけてきたことです。

しかし、こうしたケアは、一朝一夕にできるものではありません。長い修練と経験が必要とされるからです。愛する人を失い悲嘆にくれる人たちの心のケアも、簡単にできることではありません。これを適切に行える専門家を養成していくことが、日本グリーフケア研究所の使命です。

こうした研究活動を通して、聖トマス大学が社会の灯台となり、地の塩となるのであれば、これほど素晴らしいことはありません。皆さんの温かいご支援を期待しています」

〈祝福式〉

サピエンチアタワー5階に新たに開設された日本グリーフケア研究所事務室では、開所式に先立ち祝福式が行われました。日野原名誉所長、高木所長ら関係者が見守るなか、聖歌・聖書朗読・祈願の後、池長理事長が各室を祝福されました。

小田学長は挨拶のなかで、研究所設立に至った経緯を振り返りながら、研究活動を通じて本学が担う社会的使命の重さを熱く語りかけました。

メインストリートには、地元の市民グループの模擬店や体験コーナーなどが並んだ

開会の辞を述べる小田学長

近隣住民でつくるコーラス隊の合唱が朝のグラウンドに響く

STU レポート ①

第45回 聖トマス大学祭

新聖祭

2008年11月2日・3日

聖トマス大学となって2度目の大学祭。
「共生」の理念のもと、地域に開かれた大学をめざす
本学ならではの取り組みも出始め
新聖祭の名前にふさわしい
ユニークで楽しい2日間となりました。

広大なグラウンドは、家族連れには絶好の休憩所となっていた

今年の大学祭で特に注目を集めた平和祭の展示コーナー

学生支援室が開催した折り紙教室

本学卒業生である大上留利子さんのミニライブは、ホームカミングデーのメインイベントとなった

(上)
尼崎市在住の沖縄出身者でつくるグループがエイサーを披露した
(下左)
本学の空手道部と芦屋大学の空手部による演武
(下右)
本学の文化局に所属するクラブ、邦楽英華会による琴の演奏

聖トマス大学祭「新聖祭」が、昨年11月2日・3日の2日間にわたり本学キャンパスでにぎやかに開催されました。

「英知祭」までさかのぼると、今年の大学祭は45回目となりますが、聖トマス大学祭としてはまだ2度目の取り組みです。大学祭実行委員会を中心に、学生・教職員・同窓会が力を結集して、「新聖祭」の名にふさわしい新鮮な企画やアイデアあふれる大学祭をめざしました。

中でも画期的な取り組みとなったのが、これまで地域住民の方々が進めてきた尼崎市の「平和祭」が、今年から新聖祭と共催の形となって、本学で開催されるようになったこと。

学生たちの発表や模擬店、イベントに加え、地元の町内会の皆さんや福祉施設の方々も多数参加して、朗読劇や紙芝居、子どもたちの体験コーナーなどの催し物も充実。大学と地元住民が連携した、これまでにない大学祭が実現しました。本学がめざす「共生」の理念が、ひとつの具体的な形になったといえるでしょう。

また本年度の大学祭では、同窓会「聖トマス大学サピエンチア会」が2013年の開学50周年を念頭に置いて、ホームカミングデーの催事に注力。同窓会総会を中心に、ミニライブなどのプログラムも取り入れられ、例年にない盛り上がりを見せました。

(上)
井勢研究室は「お菓子屋ケンちゃん」
(中右)
地元ボランティアによる大型紙芝居「地雷ではなく花をください」
(中左)
園田地区のNPO法人によるおもちゃづくり体験コーナー
(下右)
子どもたちも多数訪れて、本学学生と交流
(下左)
キッズチアリーダーのパフォーマンスも行われた

STUレポート②

1年間のブランクを乗り越えて伝統の「英南戦」に挑む。

本大会はハンドボールで幕を開けた

善戦したが後半に力尽きたサッカー

黒のユニフォーム"St.Thomas"が敵陣に攻め込む

終日、力強いエールを送り続けた応援団の面々

2008年11月15日・16日の両日、第41回英南戦が名古屋の南山大学で開催されました。カトリック精神を共通の基盤とする学校法人南山学園と学校法人英知学院がスポーツ対抗戦を通じて交流を深め合うこの競技大会は40年という長い歴史を誇る伝統の行事です。

昨年は参加クラブ数不足により開催中止という大きな試練を経験しましたが、今年は選手をはじめ、実行委員会・教職員・同窓会など多くの関係者の尽力で、1年間のブランクを乗り越えての開催となりました。

11月15日の軟式テニス「先陣戦」を皮切りに、16日の本大会では、ハンドボール、バスケットボール、卓球、サッカー、硬式テニスの6種目で熱い戦いが繰り広げられました。

大会当日は雨模様の肌寒い1日となりましたが、秋深まる南山大学の美しいキャンパスを舞台に、両校の参加者たちはスポーツを通して親交を深めるとともに、英南戦の伝統の重みを実感した様子でした。

競技の結果、各種目とも南山大学が勝利を収め、総合優勝を果たしました。本学の参加チームは、人員・練習量とも十分とはいえない状況下、それでも南山の強豪チームに果敢に挑戦する姿が、さわやかな印象を残しました。

また選手ばかりでなく、両校応援団の気合いのこもったエール交換や応援が、伝統の一戦を大きく盛り上げたことはいうまでもありません。

聖トマス大学として戦う英南戦の新たな歴史づくりに向けて、本学の選手たちは、これから1年、日々練習を積み、力を蓄えていくことでしょう。また選手たちをサポートする全学の熱い思いをさらに結集させて、私たちはこの秋の英南戦での勝利をめざします。

シングルで肉薄するも無念の惜敗

雨に濡れた紅葉が美しい南山大学のキャンパス

開会式で体育館に勢揃いした両校チーム

STUレポート③

新しくて懐かしい我が母校 聖トマス大学に帰る日。

ホームカミングデー開催（2008年11月3日）

サピエンチア会 | 聖トマス大学同窓会

おかえりなさい！母校へ

お待ちかね大上留利子ミニライブが開演

秋晴れの一日 大学祭と並行して開催

2008年度サピエンチア会（聖トマス大学同窓会）ホームカミングデーは、聖トマス大学祭「新聖祭」期間中の昨年11月3日に実施されました。

秋晴れの好天に恵まれた当日は、正午から物故教員・卒業生の追悼ミサが行われた後、午後1時からコロクトリウムで、約300名の卒業生が参加して2007年度同窓会総会が開催されました。サピエンチア会会長 和田隆氏の挨拶に続き、2007年度の事業報告ならびに決算報告、2008年度活動計画案・予算案が起案され、いずれも滞りなく審議・承認されました。

2008年度の活動計画案・予算案が起案・承認された

総会に引き続きホームカミングデーの催事に移り、小田学長挨拶とチアリーダー・アトラクションの後は、いよいよメイン・イベント。本学卒業生で日本を代表するロック&ソウル歌手、大上留利子さんによるミニライブが開演。「アメージンググレース」「大阪で生まれた女」など、心に響く歌声と楽しいトークで会場は一気に盛り上がり、大学時代の思い出話に花が咲きました。

母校に帰ってきた 元気な卒業生たち

2007年5月、長らく慣れ親しんだ「英知大学」から「聖トマス大学」へと大学名が改称され、新たな歴史を歩み始めた本学ですが、英知大学の面影をまだまだ色濃く残すキャンパスに、卒業生たちは新しさと懐かしさを同時に感じている様子でした。久々に母校に帰ってきた卒業生のなかには大上留利子さんの他、昨年の北京パラリンピックのアーチェリーで活躍された山川八重さんの姿もありました（13ページ参照）。

また、卒業生たちは同日開催されていた第45回聖トマス大学祭「新聖祭」の模擬店やさまざまな催しにも積極的に参加。現役学生や教員・職員との交流があちこちで見られました。新生「聖トマス大学」にとっては、現在と過去をつなぐ歴史の積み重ねを実感できた有意義な一日となりました。

ピアノ演奏は菅田さん

2007年度同窓会総会のひとコマ

熱唱する大上留利子さん

大上さんのトークに沸く卒業生たち

なごやかな雰囲気に包まれた会場

特別企画

卒業生からのメッセージ

本学の前身、英知大学の設立から今年で46年。卒業生は約8000人を超えました。
今回は、各界で活躍中の5人の卒業生に学生時代のお話をうかがいました。

居心地のよい家庭的な雰囲気のなかで勉強にも部活にも打ち込めました。

——当時はどんな大学でしたか？

第一志望の大学に入り損ねて、それほど期待もしないで入学したのですが、スペイン語の授業がとても面白くて、すぐに気に入りました。歌いながらスペイン語を覚えていくようなユニークな授業もあって楽しかったですね。小さなキャンパスで、学生数も少なくて家庭的な雰囲気。とても居心地の良い大学でした。

——大学生活で得たものとは？

3つあります。ひとつは体力。ワンダーフォーゲル部に所属して、毎日大学から競馬場まで往復5キロの道を走って体をつくりました。その「貯金」があるおかげで、この年になるまで病気ひとつせずにやってこれました。2つ目は、最後までやり通す精神力。部活で培った粘り強さですね。3つ目は小さな大学で育ったので仲間意識、要するにコミュニケーション能力がついたということです。この3つは社会に出てから役立つ重要な能力になるのですが、すべて大学生活で養うことができました。

——大学・同窓生にメッセージを

一番思い出に残っているのはイスパニア文学科を創設されたホセ・ルイス・アルバレス先生のことです。学問には厳しかったけれど、人間的に非常に温かい方で、日本をこよなく愛しておられました。14年前にお亡くなりになったとき、アルバレス先生を偲ぶ本ということで、記念書籍を出版しました。先生の教え子である多くの大学の先生方や息子さんにも協力いただき、良い本ができたと思います。同窓生の皆さん方にも浄財を寄付いただき、感謝しています。以前は同窓会の仕事をしていたのですが、いまは仕事が忙しくて時間がとれません。でも、いつかまたみんなで集まりたいですね。そのときを楽しみにしています。

加藤康雄さん

株式会社創元社常務取締役営業部長
(1970年西文科卒)
大阪府高槻市出身。クリスチャンだった義兄の勧めで本学に入学。翌年、別の大学を受験するつもりだったが、本学のあまりの居心地の良さに再受験の夢を放棄。就職活動中、友人に誘われて創元社を受験し、合格。同社では営業畑を歩み続け、現在に至る。

2008年北京パラリンピックに出場アーチェリーとの出会いは本学でした。

——どんな大学生活でしたか？

楽しかったですね。授業がなくても大学には毎日通っていたほどです。仏文科を選んだのは、何となくフランス語がかっこよく思えたから。

アーチェリーとの出会いも本学です。当時はアーチェリー部があったので私も入りたかったのです。でも、私は小1のときに骨肉腫を患って片足が義足です。日常生活に支障はないのですが、部員の人たちが準備運動でグラウンドを走ったりしているのを見て、私には無理だとあきらめました。

——では、いつからアーチェリーを？

きっかけは1995年1月の阪神淡路大震災です。結婚して神戸に住んでいた私は、わずか10数秒の間にすべてが失われてしまう大災害を目の当たりにして、元気なうちに何かやりたいと強く思うようになりました。それで以前から興味のあったアーチェリーを障害者に指導してくれる施設が神戸にあることを知って、すぐに飛びつきました。2000年に身障者国体に出場した頃から真剣に練習するようになりましたね。

アーチェリーで面白いのは健常者とノーハンディで戦えるところ。私でも一般国体の予選に出て、出れば最終予選まで残ることができます。パラリンピックに出たのは今回が初めてですが、そこに至るまでに、アーチェリーを通じて全国にお友だちができたことをうれしく思っています。

——母校にメッセージを

昔もいまと同じように、こじんまりとしたいい大学でした。おかげで他学科の人ともすぐに仲良くなれました。そういうアットホームな居心地の良さはいつまでも残してほしいですね。それとアーチェリー部をいつか復活してほしい。そのことをぜひ後輩の皆さんに託したいと思います。

山川八重さん

兵庫県アーチェリー連盟登録選手
(1977年仏文科卒)
島根県出身。父親の仕事の関係で大阪へ。小学1年生で骨肉腫を患い、以来片足が義足に。本学でアーチェリーと出会う。卒業後、結婚して神戸市在住。1995年の阪神淡路大震災で奮起して、2000年の身障者国体に出場。2008年には北京パラリンピック出場を果たす。

難波孝宏さん

ウィーブ株式会社代表取締役社長
(1975年西文科卒)
岡山県生まれ、兵庫県育ち。本学卒業後、会社員、居酒屋、訪問販売など数々の職業を経験した後、40代後半でウェブマーケティングの会社を起業。"最年長ITベンチャー社長"を自認する。学生時代に多くの友を得たことが財産であり、夫人も本学のOG。同窓会の活性化に意欲を燃やす。

卒業生のネットワークづくりが課題 みんなもっと母校に集まろうよ。

——どんな大学生活でしたか?

姉の知人から「家族的な大学で面白いよ」と勧められ、入学しました。英語は大の苦手だったし、フランス語は発音が難しそうだと思い、西文科を選びました。

大学は遊ぶところだと勘違いして入った私にとっては厳しい環境でした。スペイン語の興津(おきつ)先生がとくに厳しくて、30人の少人数クラスだから代返はきかないし、出席日数が足りないと試験も受けられない。だから中学・高校以上に勉強したというのが学生時代の思い出です。結局そういうケジメを教わったことが社会に出て一番役立ったと感じますね。

——"最年長ITベンチャー社長"なのですか?

私より年上の社長に会ったことがないものですから(笑)。でも、起業までの道は遠かったですね。大学卒業後に入社したアパレル会社は繊維不況で景気が悪くなり、退職。女房と二人で始めた飲食業のかたわら、アルバイトで訪問販売の仕事をしました。成功したものの、やりがいが感じられず辞めて、ちょうどその頃ゲーム制作会社をやっていた友人に誘われたのがきっかけで40代後半にしてやっとウェブマーケティングの会社を立ち上げました。

——母校にメッセージを

大学生活を楽しむというより、大学そのものが楽しめる大学でした。極端にいえば、学内にいれば朝から夜まで楽しめる。そしてコミュニケーションのとりやすい大学だったので、友だちもたくさんできました。実をいえば女房もここの同窓生で、学友の結婚式で知り合いました。しかし、他大学と比べると、卒業生同士の結びつきはまだまだ強いとはいえません。これを機にもっと母校に集まろうよとOB・OGの皆さんに言いたいですね。

大学で広がった音楽仲間の輪 母校でゴスペル教室も始めます。

——どんな大学生活でしたか?

堺市から通っていました。家を朝7時半に出て、南海・地下鉄・阪急と乗り継いで、ぎりぎり9時に着きます。よく遅刻しましたね。

小さいときから歌うことが好きだった私は、大学へもギターを持って行きました。芝生の上のベンチに座ってオリジナルのブルースをよく歌ったものです。それで軽音にいた人に「いっしょにやりませんか?」と声をかけられ、バンドを結成することになって、それがプロへの道につながりました。

——ずっと音楽の道を歩んでこられましたね

歌は好きでしたが、高校生までは歌手になりたいとか全然思っていませんでした。この大学に入って音楽仲間ができたことで、いまの私があると思っています。本学出身のミュージシャンはいまも音楽業界にたくさんおられるんですよ。

私は人がうれしそうにしてる顔、幸せそうな顔が見たいなと思うんです。人にいいことをしたらいい笑顔が返ってくる。それで自分も幸せな気持ちでいっぱいになる。歌も同じで、人に喜んでもらえることが本当にうれしくて歌っています。歌手もサービス業です。若い頃は自分の好きに歌いたいと思っていましたが、いまではお客様が喜んでくださるなら何でも歌いたいという心境になってきました。

——母校にメッセージを

「真夏の夜のジャズ」という映画を観て、ゴスペルの女王といわれるマヘリア・ジャクソンの歌を聴いてから、ずっとゴスペルシンガーってすごいなと思っていました。同じくゴスペル出身のアレサ・フランクリンの歌を私はずっと歌い続けてきました。その大好きなゴスペルソングの教室を、この聖トマス大学で開かせていただきます。興味のある方はぜひいっしょに歌いましょう。

大上留利子さん

ロック&ソウル歌手
(1974年仏文科卒)
島根県隠岐島に生まれ、生後まもなく大阪府堺市へ。大学でバンド活動を始め、音楽一辺倒の生活に。卒業後、ロックコンテストで優勝し、プロシンガーの道に。『大阪で生まれた女』などヒット曲を放つ。2009年より本学でゴスペル教室を始める予定。

学園祭、留学、友だち……自分を育ててくれた母校に感謝。

——どんな大学生活でしたか?

留学制度がしっかりしている大学だと聞いたのが入学の理由です。入学して1年間だけフォークソング部に所属し、その後は学園祭の実行委員をやりました。ブレイク前の渡辺美里さんを呼んで、契約直後に大ヒット。学生会館の2階が満杯になったのは忘れられない思い出です。

もうひとつの思い出はアメリカのローラス大学に留学をしたこと。ローラスは知らない人でも声をかけるくらい素朴な田舎町で本当に良かったですね。ぼくの夢はハリウッド映画に出ることだったので、帰国前にロサンゼルスに寄ってオーディションを受けました。それでコメディショーに出させてもらい、初舞台で大ウケし、スタンディングオベーションとなりました。これも忘れられない思い出ですね。

——米国のTV番組で日本人初の司会者だとか?

ええ。2009年にはぼくが出演した映画(マット・デイモン主演)が日本で封切られます。順風満帆のように見えるでしょうが、ここに至るまでには語り尽くせないほど紆余曲折がありました。

世界のトップになろうと思ったら、だれにも負けない何かをひとつ探すことだと思うのです。ぼくもいろいろ考えて、俺は大阪人だ、俺はおもろい、だったらコメディやってみよう、日本のコメディアンでアメリカ人を笑わせられる奴はいない……。そんな発想で次々挑戦していきました。

——母校にメッセージを

学生数が少なくてアメリカのハイスクールなみ、だから友だちもすぐできるし、教授陣には凄い先生がそろっていて勉強しようと思えばいくらでもできる——。そんな本学で学び、卒業したことを誇りに思っています。

神田瀧夢(ろむ)さん

エンターテイナー
(1987年英語英文科卒)
大阪・天王寺に生まれ、貝塚で育つ。世界に通用するエンターテイナーになると志を立て、本学在学中に米国留学した際にコメディショーのオーディションに合格し、観客から喝采を浴びる。卒業後は数々の困難を経て、ハリウッド映画に出演。米国のTV番組で日本人初の司会者にも抜擢される。

Topics & Information

キャンパス内配水管改修工事と図書館改修工事が完了。

昨年の夏に行ったメインストリートの配水管取り替え工事に引き続き、昨年11月より、コロクトリウム、クラブハウス、セミナーハウス、体育館の裏側を通る南北の配水管の取り替え等の改修工事が行われました。

また上記工事と並行して、雨漏りによる図書の保護のため、急遽11月から図書館の改修工事にも着手し、いずれも2月に完了しました。

配水管埋設後は構内通路も大変きれいになり、また図書館も1号館に合わせて外壁をシックな色調に塗装し直し、見違えるほどになりました。工事期間中、皆様には大変ご迷惑をおかけしました。工事へのご協力に対し、改めて御礼申し上げます。

雨漏りが心配された図書館屋上もきれいに整備されました

図書館の外壁も1号館と同じレンガ色に統一されました

配水管が整理され美しくなったクラブハウス裏の道路

シックなイメージに生まれ変わった図書館エントランス

体育館裏の通路もすっきり

陽光に映える図書館と研究棟

来場者7000人を超える大盛況。「第23回園田カーニバル」を開催。

地元の市民が7000人以上も参加する一大イベントとなりました

2008年9月6日(土)、聖トマス大学を会場に、地元、園田地区の夏の風物詩「園田カーニバル」が開催されました。1984年9月に第1回が開催されてから、今回で23回目になりますが、本学で開催されるのは今回が初めてです。

前日は会場設営中に大雨が降り出し、グランドがぬかるみ、思うように準備が進まず、やきもきしましたが、当日は朝から、昨日の雨が嘘のような快晴に恵まれました。

ステージパフォーマンス「ふれあいコンサート」では、園田地区の幼稚園、小学校、中学校、高校の児童・生徒や、地域で活躍されている方々が出演し、華麗な演奏を披露しました。その他にも、フリーマーケットや模擬店、子ども広場、バザーなど、家族そろって楽しめるイベントが盛りだくさんで、残暑の中、多くの親子連れでにぎわいました。プログラムの最後は「市民総おどり」で、盛り上がりも最高潮に。

本学も生涯学習コーナーへの出展をはじめ、ボランティアセンターのスタッフ、キッズ・チアリーディングのメンバーなどが多数参加しました。

当日は7,000人を超える尼崎市民がカーニバルに参加しましたが、大半の参加者が「聖トマス大学は初めて」という方でした。今までのように、「ただそこにあるだけ」の大学ではなく、今回のように、本学が地域活動の場として多くの市民の方々に利用されることは、大変有意義なことです。こうした地域活動の積み重ねが、本学のめざす「共生」へのひとつの流れとなっていく、確かな手応えを感じた1日でした。

京阪神のサッカー少年が聖トマスカップめざして大熱戦!

次の大会にも、さらに成長して戻ってきてくれるでしょう

本学のグラウンドは1日中熱気に包まれました

熱戦の末、F.C WEED（中央）が聖トマス大学杯を獲得

フィオーレ兵庫尼崎トマスF.C.とF.C WEEDの試合がスタート

本学が後援するジュニア・サッカークラブ、フィオーレ兵庫尼崎聖トマスF.C.の主催で、3月8日（日）朝から夕方まで、チームの交流と子どもたちの健全育成を目的としたサッカー大会「聖トマス大学杯」（U−8）が開催されました。

今年は2回目の大会でしたが、本学のグラウンドには、選手・スタッフ・保護者、総勢約700名が集まり、大きな盛り上がりを見せました。

決勝戦は、約200名以上の観衆が見守る中、F.C WEEDSと武庫之荘FCの対戦となり、力強いプレーの光ったF.C WEEDSが優勝の栄冠を手にしました。

本学を活動拠点とするフィオーレ兵庫尼崎聖トマスF.C.は、予選を勝ち上がり決勝トーナメントに進出するも、一歩及ばず、本学とも交流の深いF.C WEEDSに惜敗しました。

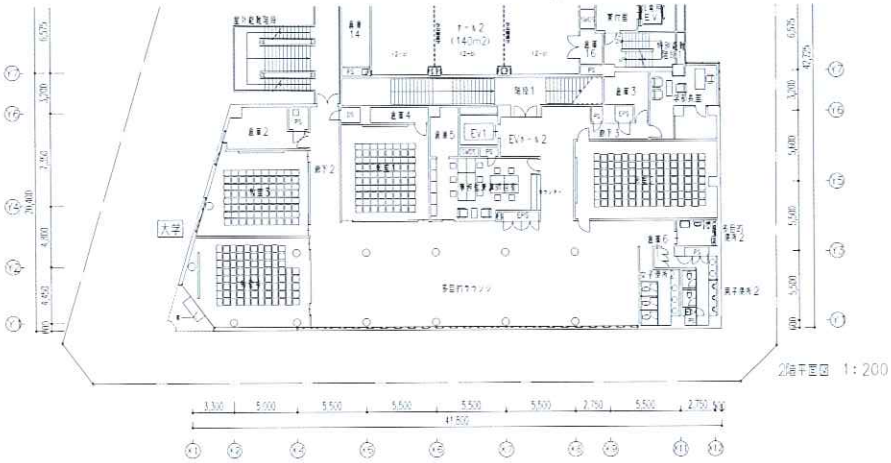
9月には次の大会が控えており、フィオーレは今日も大学体育館前のフットサルピッチで熱く楽しい活動を続けています。

聖トマス大学梅田キャンパス（仮称）について。

前回の大学通信特別号でもお伝えしたように、本学の設立母体であるカトリック大阪大司教区は、現在、大阪梅田の旧北野教会地所に4階建ての「カトリック大阪センター」（仮称）を建設中です。本学は、大阪大司教区のご厚意により、その2階を「聖トマス大学梅田キャンパス（仮称）」として使用させていただく予定です。

施設の完成は２年後の2011年春ですが、阪急梅田駅から徒歩6分、地下鉄御堂筋線中津駅から徒歩1分という好立地を生かした多彩な教育・研究活動を展開すべく、本学では新キャンパス運営の準備を開始しております。

大学院や学部の授業はもとより、キリスト教文化研究所が主催する「カトリック研究講座」「夏期神学講座」、また今年４月に設立された日本グリーフケア研究所が主催するグリーフケアワーカーの人材育成講座などの開催も予定されています。



カトリック大阪センター（仮称）の2階に設置される聖トマス大学梅田キャンパス（仮称）の基本設計図。
図面上部（北側）には棟続きで、18階建てのハートンホテル北梅田が入居します。

Thomas
聖トマス大学通信「トマス」Vol.101　2009年3月発行
発行：聖トマス大学 入試広報課　〒661-8530 兵庫県尼崎市若王寺2丁目18番1号　Tel：06-6491-5100　Fax：06-6491-7120　URL http://www.st.thomas.ac.jp

留学生からのメッセージ ②

集中できる環境が、英語レベルを飛躍的に押し上げてくれた。

ワシントン州立大学（アメリカ）で語学留学

川瀬尚美さん
Kawase Naomi
（旧英知大学　文学部英語英文学科３回生）

アメリカの姉妹校、ワシントン州立大学に昨年3月から11月まで約8カ月間留学し、英語力を飛躍的にレベルアップすることができました。

大学附属の語学スクールで学んだのですが、最初のクラス分けテストでは6段階のレベル3でした。このレベルは比較的簡単で、難なくレベル4に上がることができました。日本でも親元を離れて生活していた私は、アメリカの寮生活にもすぐに慣れ、また大学周囲は広大な自然が広がる落ち着いた環境で、集中して勉学に励むことができました。こうして半年ほどで、順調にレベル5に到達することができました。

しかし、さすがにレベル5は程度が高く、課題図書は増え、レポートや発表も頻繁にこなさなければなりません。図書館で夜遅くまで必死に調べ、寮ではレポートに懸命に取り組みました。最終レポートはアメリカ政治についてという難題でしたが、懸命の努力の甲斐あって、クラス発表では高い評価を得ることができました。

勉強の合間に、寮で私のために仲間が開いてくれた誕生パーティーや、シアトルにイチロー選手を見に行ったことなど、心に残る思い出もたくさんできました。将来は、英語教師になり、アメリカ留学で学んだ英語上達法を教えることができればと考えています。

かわせなおみ／三重県立名張西高等学校出身。英語が好きで高校から英語科に進学。大学では、まず2回生の夏休みにイギリス研修旅行で海外体験をした後、2008年3月から11月までアメリカに長期語学留学。海外でも着実に学習を重ね、英語力を大きく伸張させることができた。

STUからひとこと

「虎穴に入らずんば虎子を得ず」（Nothing ventured, nothing gained）という諺があります。英語を身につけたいと思うけれど、自分の英語力では無理だと思ってしまい、頭の中を願いが虚しく巡っているだけに終わってしまう……ならば思い切って「虎穴」に飛び込んでみてはどうでしょう。おそらく川瀬さんも、そんな気持ちでアメリカに向かったのでしょう。20年におよぶSTU留学生気質の伝統が、彼女に思いきり英語を学ばせ、いま彼女は「虎子」を得て帰国することができました。